

【連載】

日中学術交流の現場から 第十回

北京からゴジラ同級生俳優、宝田明さんへの手紙(第一便)

山口直樹

(北京日本人学術交流会責任者、市民科学研究室会員)

はじめに

拝啓 ゴジラ同級生俳優、宝田明さま

ごぶさたしています。先日は、著書『銀幕に愛をこめて—ぼくはゴジラの同期生』(筑摩書房 2018)をいただきましてありがとうございます。興味深く読ませていただきました。

思えば、宝田さんとのつきあいもかなり長くなってきました。北京にお招きするつもりが、まだ実現できないまま、先の見えない世界的なコロナ禍で、非常に日本と中国の間の移動もやりにくくなり、いささか困ったことになっていますが、新聞やテレビなどでは、たまに宝田さんの姿を拝見しています。

『ゴジラ』(1954)の関係者では、社会党所属とおもわれる女性議員を演じた菅井きんさんやゴジラの中にはいつて奮闘した中島春雄さんもついになくなってしまいました。残念というほうかはありませんが、いまや、宝田さんが、もっとも古株となり『ゴジラ』(1954)の関係者のなかで「現存する最古の生物」となっているかとおもわれます。



ミュージカル『葉っぱのフレディ』上演後、宝田明氏と東京にて(2012年8月)

宝田さんが立候補しようとした「国民怒りの党」を立ち上げた小林節氏と『安倍「壊憲」を撃つ』という対談本を出している経済評論家の佐高信氏が好んで引用する俳優、成田三樹夫の言葉に以下のようなものがあります。

「最近の役者というのは、いやらしいが多すぎるよ。総理大臣主催のナントカ会というと、ニコニコして出かけて行って、握手なんかしているだろう。権力にヘタヘタするみたいな役者じゃ意味ないよ」

佐高氏と同じ酒田東高校出身という成田三樹夫のいう「総理大臣主催のナントカ会」を「桜を見る会」と言いかえることは、十分可能でしょう。「桜を見る会」にニコニコして出かける芸能人が、あまりに多すぎるように思います。

NHK の番組で「これからは戦争をするような政治家には票を入れるべきではない」といってアナウンサーから発言を止められた宝田さんから見れば、成田氏の 1982 年になされたというこの言葉は、十分に納得のいくものではないでしょうか。

宝田さんの NHK での発言の背景には近代日本の戦争や植民地支配によって過酷な引き揚げを経験せざるを得なかった人間の譲ることのできない叫びのようなものがあると思えてなりません。

今日、そのような貴重な存在となりえている宝田さんに北京でゴジラを研究してきた人間として手紙を書くことといたします。

1. 原点としての『ニッポン・ゴジラ黄金伝説』(扶桑社 1999)

私は、『ウルトラマン』(1966)や『仮面ライダー』(1971)などのような日本特撮に育ててもらった人間です。子供のころ「成人の日」を「星人の日」と思いこみバルタン星人やメトロン星人などが一堂に会し、式典をやっているのかと本気で思っていたような人間です。

『ゴジラ』(1954)を見たのは、かなり後になってからであり、大きな衝撃をうけました。

それ以来、私は、ゴジラから離れられなくなっただけですが、宝田さんに近さを感じるようになるのは、2009 年夏、北京から日本に帰国し、国会図書館でゴジラについての調べ物をしてた過程で、宝田さんの書いた『ニッポン・ゴジラ黄金伝説』(扶桑社 1998)を読んだ時だったと思います。そこで宝田さんの、お父さん宝田清さんが、満鉄の技術者だったため中国東北部のハルピンで育ち、日本に引き揚げてこられたということをそこではじめて知りました。私の専門の研究テーマが、「満州」の植民地科学史ということもあり、そこで私の研究テーマとゴジラが、つながったような気がしたのです。

それで夢中で『ニッポン・ゴジラ黄金伝説』を読み進めたわけですが、そこで宝田さんが『ゴジラ』(1954)の試写を観て泣いてしまったということをはじめて知りました。

『ニッポン・ゴジラ黄金伝説』では、以下のように記されています。

「いつの間にか、私の目からは大粒の涙が流れ出していた。それはまったく止まらなかった。止めようもなく、また止めようとも思わなかった。伊福部先生の書かれた壮厳な音楽が、流れてくる。「平和よ太陽よとく帰れかしのちこめていのるわれらのこのひとふしのあわれにめでて」劇中歌の詩が、音楽にかぶさって、頭の中によみがえってきた。

海の上に浮かぼうとしたゴジラが、それを果たせず、最期の叫びをこの世に残して没してゆく。ゴジラの全身はみるみるうちに白骨化し、それすらも融けてついには何も残さず消えてしまう。(なんて悲しいんだ。この事件は人間の愚かな行為が引き金だ。それなのに、どうしてゴジラは痛めつけられて、殺されなければならないんだ。人間ていうのは、なんてひどいことをするんだ。自分たちさえ生き延びることができれば、それでいいのか…) 私はそう思いながら、まだ泣いていた。」(140 頁)

『ゴジラ』(1954)の最後のシーンで化学者、芹沢大助が、水中酸素破壊剤であるオキシジェンデストロイヤーを用いてゴジラとともに海中に融けていくシーンですが、20 歳の青年、宝田明が、「ゴジラがあらわれたゴジラを殺せ」と考える人ではなく「ゴジラがあらわれた人間が変われ」と考える人なのだということが、よく示されている箇所だと思います。84 年の『ゴジラ』の舞台挨拶で「私はゴジラが許せません」といった俳優の方とは、ゴジラのとらえかた大きく異なっていると思います。「私はゴジラが許せません」といった認識に決定的にかけているのは、ゴジラが、アメリカの水爆実験によって安住の地を追い出され、自らの意に反してこの世界に現れてしまったという認識だとおもいます。

つづけて宝田さんは、こうも書いています。

「私は、正直に言って『ゴジラ』が、これほどに深い哲学を持った映画だとは、思っていなかった。もちろん、台本は何度も読んだ。本多監督の演技指導を受けながら、自分なりにああでもないこうでもないと考え抜いた。それでも私はたった今、見終わって感じているほどの深みを台本から読み取ることができなかつた。」(140 頁)

実を言えば、私が『ゴジラ』に惹きつけられたのもこの哲学やここに含まれている科学思想によるものといっていいです。

そのことに関しては具体的に連載の第一回で書きましたので、ここでは深くは立ち入りません。私もまたその深い哲学に魅了されたのだということだけをここでは、確認しておきましょう。

2. 庶民の姿を描いた『ゴジラ』(1954)

『ゴジラ』(1954)において東京を襲うゴジラ、防衛する防衛隊、そして逃げ惑う庶民、民衆というゴジラ映画における三角形というものが、はやくもあらわれています。

たとえば、宝田さんは、『ニッポン・ゴジラ黄金伝説』においてこう指摘しています。

「本多さんの映画には、必ず大八車に荷物を積んだり、子供の手を引いて逃げる避難民が描かれているとはよくいわれることである。

このシナリオに見られるような武器も情報ももたない、起こりうることを運命として受け入れるしかない庶民の姿を、本多さんは、共感を持って描こうとしたのである。」(111 頁)

これは、本多監督自身が、中国大陸で日本兵士として 8 年近く動員され、そこで多くの避難民を実際に目撃してきたこととも無関係ではないでしょう。そのことが『ゴジラ』という映画を奥深いものにし

ています。

それに加えて以下のような背景も宝田さんは指摘しています。

「そして、これを私はとりわけ強調したいのであるが、特撮場面でない本多さん演出になる本編の撮影にかかわっている人々の中には、あの成瀬己喜男監督の作品で力をふるっている方々の名前を見出せる。たとえば撮影の玉井正夫さん、照明の石井長四郎さん、美術の中古智さん、録音の下永尚さん」(112 頁)

「庶民の姿を描くことではほかの追従を許さない成瀬己喜男監督、そのような方と仕事をされてきた玉井さん、石井さん、中古さん、下永さんらがいてくださったからこそ成瀬作品に通じる無名の人々の現実を『ゴジラ』においてもかんじとることができたのだろう」(113 頁)

このことに関連して書いておくことがあります。2010 年頃だったと思いますが、北京在住の日本人のブロガーが集まる会で私が主催して「北京ゴジラクイズ」というのをやったことがあります。

それは結構盛り上がったのですが、その会の後に 70 歳はすぎているかという結構上品な感じのご婦人に会う機会があったのですが、その方が、「山口さんってゴジラのこと研究しているんですか」と聞いてこられるのです。それで「ええ、まあそうです」と答えると「実は…」といわれ「私の父は『ゴジラ』(1954)で美術を担当していた中古智なのです」と…。

その方は、中古智さんの娘さんだったのです。

これには仰天しましたが、庶民を描くことに貢献していた中古智の娘さんの中古苑生さんに北京で会うことができたのも何かの縁だということでしょう。

そして、宝田さん自身もまたハルピンから引き揚げてきた経験をもつ避難民だったということが、このことを強調される理由であり、おそらくは、本多監督への敬意と共感に通じているのだということ指摘しておきたいと思います。

3. ゴジラを知らなかった北京大学生

2004 年、北京大学大学院にいたとき日本に関心を持つ北京大学の学生と話していた時に

話が、日本の特撮作品である『ウルトラマン』になった時、その関連で話題がゴジラのことになりました。その時、北京大学の学生が、「山口さん、ゴジラってなんですか」といったのです。これにも驚きました。

韓国や台湾の留学生は、ゴジラのことをよく知っていました。

しかし、北京大学の学生が、ゴジラを知らないとは…。『ゴジラ』の原作では登場してくる科学者は、二人とも元北京大学教授という設定になっているのに…。一体なぜなのでしょう。

その疑問を持ったことが、すべてのはじまりだといっていいです。



北京の民間日本語学校での北京ゴジラ講義のあとで(2014 年北京にて)

その後、2004 年、秋、北京大学日本語学科の孫先生から「山口さん、日本文化紹介を北京大学生にしてくれませんか」と頼まれたので私は迷わず、『ゴジラ』(1954)の映像交えて北京大学生に日本文化紹介としてゴジラ講義を行いました。ここから北京大学にとどまらず、他の大学にも出前授業を行う“北京ゴジラ行脚”が始まりました。

中国メディア大学、中央財經大学、林業大学、中国人民大学などをまわってゴジラ講義を行いました。思えばこの年は『ゴジラ』50 周年の年でアメリカではじめてカットや編集されていない日本のオリジナルの『ゴジラ』(1954)が上映された年でもあります。

たとえば、北京大学生で私と相互学習などをしていた謝さんの私のゴジラ講義に関する感想は以下のようなものでした。

「これまで科学が大変進歩したのに人間の能力で理解できないことはまだ多いです。その角度で見れば古い人間と今の人間とは同じだと思います。それで今のモンスター文学作品と映画は一種の現代的な背景下の神話だとも思います。

でも中国でなぜそのモンスター作品はないですか。共産党の統治で中国人の想像力を破壊されたわけだと思います。共産党の思想にとれば、人間の能力は何より偉大なものって思うので中国ではモンスター作品をつくるのは難しいです。」

現代中国では、青年層に妖怪ブームが起きていますが、これは人間の能力を何より偉大と考える風潮への反動のようにも思えます。たしかに彼女のいうとおり現代中国のモンスター映画は、ほとんどなく、あったとしても香港で撮影されているものが、ほとんどです。

他には次のようなものがありました。

「日本のアニメは大好きです。私は小さい時、いろんな日本のアニメを見たことがある。それは私にたくさんの楽しみを与えてくれた。たとえば、どらえもん、ドラゴンボール、スラムダンク、それは中国で一番有名なことだとおもう。マンガをみたことがあり、それで特撮にも興味がある。はじめてゴジラをしたのは、どらえもんを見たとき、なにか道具で大雄さんはゴジラに変えられた。そのときゴジラはなんなのかわからなかった。今回ゴジラをみることができ意味がわかった。大変面白いことだと思う。日本では 50 年代にこんなものをつくることのできたのを知り驚いた。」(北京大学生)

ここでいう大雄さんとは、のび太のことで、どらえもんは、現代中国では完全に浸透しており、厳しい競争社会の一人っ子の孤独をいやす存在として大人気です。彼らは、『どらえもん』や『名探偵コナン』をとおしてゴジラらしき存在を知ったようです。

中国では ACG という言葉があります。日本の A(アニメ)C(コミック)G(ゲーム)をまとめてこのように言います。

ただ、日本の特撮はまた、独立した一領域として考察する必要があるだろうとおもいます。

ですから ACGT と呼ばれるべきものかと思えます。

ゴジラが現代中国で知られていない大きな理由のひとつには、『ゴジラ』に反核のメッセージが存在しているということが推測できます。核大国になりつつある現代中国では核に関する表現が、非常に難しくなっています。私は、宝田さんを北京にお招きするために北京電影学院の教授に講演の話を持って行ったのですが、応答が得られていません。彼らが、あまり積極的でないのは、こうした現代中国における核の表現の難しさを反映しているのかもしれない。

最近の例では『はだしのゲン』の中国語版が、台湾では出版できましたが、まだ中国大陸では出版できないということがあります。庶民レベルの中国人に問うと「いい作品だ」といつてくれるのですが、中国共産党の上層部に行けば行くほど、意見は厳しいものになっていくようです。

4. ゴジラ同期生である宝田明の「もうひとりの同期生」

ゴジラとともに第五福竜丸も現代中国では、ほとんど知られていません。1954 年に周恩来は、第五福竜丸の被曝に関して「アメリカ帝国主義が、アジアの人民を被曝させた」と批判していました。周恩来は、中国人民は、日本の反米の世論と連帯すべきと考えていました。多くの中国人は、その時点では第五福竜丸を認識していましたが、その後、忘却されています。

1954 年、日本でも被爆した当初は、第五福竜丸のことが世界中にニュースとなって流れていましたが、その後、時間の経過とともにだんだんと人々の記憶から第五福竜丸のことは、消えつつありました。しかし、日本で第五福竜丸が、完全に忘れ去られることがなかったのは、宝田さんと同じく「満州国」から日本に引き揚げて来た人が、新聞に投書をしてくれたからでした。

すなわち、「満洲国」から引き揚げてきた武藤宏一さんが、1968 年 3 月 10 日、朝日新聞の声欄に第五福竜丸を保存すべきだという「忘れてよいか第五福竜丸」という投書をしなければ、第五福竜丸は、人々の記憶から消え、第五福竜丸展示館も存在しなかったかもしれないです。その意味で「満州国」からの引き揚げ者は、重要な役割を果たしてきたといえるでしょう。なお「満洲国」建国は 1932 年 3 月

1 日であり、第五福竜丸が被爆した日と同じ日です。

そして、その中国では忘却された第五福竜丸の乗組員にも宝田さんと同期生がいます。

それが、第五福竜丸の元乗組員の市民科学者、大石又七さんです。

1934 年、静岡焼津に生まれた大石さんは、第五福竜丸に乗り 20 歳でビキニ環礁のアメリカによる水爆実験で被曝しました。宝田さんと同じ年です。ちょうど宝田さんが、『ゴジラ』の撮影をしていたころ周囲の妬みに耐えかねて東京の匿名性の中に逃げ込んで、その後クリーニング店を営んでいました。最初は、大のマスコミ嫌いの人だったが、1980 年代前半から社会的発言を始め、本を 4, 5 冊書き上げています。それが、2021 年 3 月 9 日に宝田さんに送っていただいた『ビキニ事件の真実』(みすず書房 2003) です。20 歳の時、漁師だった人が、その後、独学し、本を、4, 5 冊書くなどということは、尋常なことではありません。

私は、占領史家の笹本征男氏の関係で大石さんと知り合いになっていました。

2005 年 6 月、私は大石氏を囲む「ビキニ事件の真実を学ぶ会」で「ゴジラの誕生と第五福竜丸事件」と題する報告を行うことになりました。実は、私はその報告会の後で行われた二次会の席で大石氏にゴジラのおもちゃをプレゼントしたことがあります。第五福竜丸の元乗組員にゴジラのおもちゃをプレゼントした人間は、私ぐらいのものなのかもしれません。しかし、とにかく大石氏は、私がプレゼントしたゴジラのおもちゃを気に入ってくれたようです。その頃から大石氏は、「孫たちが来ると山口さんのくれたゴジラで遊んでいます。」など書いた暑中見舞いや年賀状を北京まで送ってくれるようになっていました。

同じくビキニ環礁で死の灰を背負っているという共感があったのかもしれませんが。

本も北京に三冊送ってもらいました。また、大石さんから北京まで録音テープが送られてきたこともあります。なんだろうとおもってその録音テープを聞いてみると神戸のラジオ局がゴジラ特集を組んだときの番組が録音されていました。大石さんは、そのラジオ番組にゲストとして招かれていたのですが、そこで「中国の北京でゴジラに関心をもって研究している人がいる」といって私のことにも言及してくれていたのです。

5. 実現できなかった宝田明×大石又七対談

また、宝田さんが、2011 年 3 月 11 日の午後、大地震が起こった直後、北京にいる私のところにまで電話をくださったことがありました。その前日か、前々日かの『徹子の部屋』のゲストが、宝田さんだったと記憶しています。そして、そのときちょうど東京電力の勝俣会長が、北京に来ていたのです。また、北京に東京電力北京事務所が設立されたのは、2011 年 3 月 1 日のことでした。この年、中国ではネットで黒沢明監督の『夢』という映画の話題でもちきりでした。というのもこの映画のなかでは、さまざまな夢がオムニバス形式で語られていくのですが、原発が爆発する夢を見るという話がありました。この部分が、東京電力から講義を受け、黒沢明のようなビッグネームであっても日本の映画会社からの配給ができなかったというのはなしがあります。それはとにかく、中国のネット民たちは、「夢が現実になった。正夢になった」と話題にしていたのです。

福島第一原発の爆発という出来事に関連してテレビに大量に出現した「専門家」について大石さんは、「紙の上だけで学問をしている専門家が、テレビにたくさん出ています。こういう専門家には怒りを覚

える」といった意味のメールを私にくれたことがあります。

南アフリカのネルソン・マンデラの黒人政権が核兵器廃絶をやった話をメールで書くとすごく喜んでくれるような人でした。最近ではローマ法王にまで手紙を書き核廃絶に執念を燃やしていました。実は、宝田さんの『ニッポン・ゴジラ黄金伝説』のコピーを大石さんに送ったのは、2011 年 3 月 1 日のことでした。これを読んだ大石さんは、「宝田明さんは、雲の上の人かと思っていましたが、苦勞されたんですね」と言っていました。

以前、宝田さんからミュージカル『葉っぱのフレディ』に誘っていただいたことがありました。聖路加国際病院の日野原重明医師の意をくんでのミュージカルだそうですね。

実は、大石又七さんは、舛添要一のような人を批判する一方で、日野原重明医師のことを高く評価していました。それで私は、宝田明×大石又七対談が実現すれば面白いものになるではないとか考え、その準備をしていました。

2021 年 3 月 9 日に宝田さんに送ったものの中に大石又七著『ビキニ事件の真実』があったのはそのためです。そして、宝田さんから私が送った大石さんの『ビキニ事件の真実』に対して「第五福竜丸のこともっとよく知りたかったんだよ」という電話があったのは、奇しくも武藤宏一さんが朝日新聞に投書したちょうど 53 年目の 2021 年 3 月 10 日のことでした。

しかし、それから 11 日後の 2021 年 3 月 21 日、私は第五福竜丸展示館の市田真理さんから大石さんの訃報の知らせを受け取ることになります。市田さんとはお会いになったことがあるようですが、大石さんは、私が宝田氏から電話をもらう 3 日前の 2021 年 3 月 7 日にすでに亡くなっていたのでした。私は「友の足音が消えた」と思いました。残念ながら、私が構想した宝田、大石対談は実現できなくなってしまいました。実現していれば、はたしてどんな対話になったのでしょうか。

6. 宝田少年とアンドレ・ジッド

2020 年 3 月 9 日、私が宝田さんに送った本が、もう一冊あります。

それはアンドレ・ジッド『ソヴィエト旅行記』国分俊宏訳(光文社古典新訳文庫,2019)でした。なぜアンドレ・ジッド『ソヴィエト旅行記』だったのでしょうか。

それは、宝田さんが、ハルピンでソ連軍の占領による過酷な少年時代を過ごしていたことと無関係ではありません。宝田さんは、『送別歌』(ユニコ舎 2021)で書いています。

「学校も病院もすべて閉鎖されたハルピンでは、ソ連兵の暴行、略奪、強姦が昼夜を問わず横行する無政府状態で、その乱暴狼藉ぶりは、目に余るものでした」(56 頁)と。

宝田さん自身、ソ連兵から撃たれ、その傷がいまだに癒えない、またどんなにすばらしいロシアの芸術を見てもソ連への憎しみが、消えないのだといわれていました。

最近では満蒙開拓団が、自分たちが助かるためにその開拓団の女性たちをソ連軍に対して性的奉仕をさせていたことが、女性たちの証言で明らかになっています。

一体なぜ、ソ連軍は、これほどひどかったのでしょうか。その問いを解く鍵が、アンドレ・ジッド『ソヴィエト旅行記』には含まれていると思ったので送りました。

アンドレ・ジッドは、フランスの 1869 年生まれの作家ですが、彼が、1936 年 6 月から 8 月にかけてソ連を旅行した「ソヴィエト旅行記」(1936 年 11 月)と帰国後に書かれた「ソヴィエト旅行記修正」(1937 年 6 月)の二つの文章が、この本には、収録されています。なぜ、ジッドは、ソ連から招待され、旅行することになったのでしょうか。

1917 年のロシア革命で誕生したソ連は、世界初の社会主義国として世界の知識人から注目を集めていました。ジッドもその一人であり、ジッドをとらえていたのは、社会主義における「平等」という理念でした。

また、フランスは第一次世界大戦で大きな被害を受けており隣国ドイツでは、30 年代にナチスが台頭してくるなどソ連には、反戦や反ファシズムの拠点として期待する知識人も多かったです。ソ連から新しい文化が、生まれると期待した人も多かったようです。ジッドも社会主義ソ連へのシンパシーを公言し、ソ連に近い人間だと周囲からも見られていました。そこでソ連政府から招待されて旅行するのですが、ジッドは、そこで失望してしまいます。

たとえばジッドは「レニングラードから戻ってくると、モスクワの醜悪さがより一層際立って感じられる。精神が圧迫され、鬱々とされるほどだ。ごくわずかな例外を除いて、建物はみな醜く(最新の近代建築に限ったはなしではない)」それぞれ互いにまったく調和していない。」(48 頁)と書いています。

また「ソヴィエト旅行記修正」(1937 年 6 月)では「私たちがソ連で見たものがどれもこれも楽しそうに見えたのは、ここでは楽しそうでないものにはことごとく疑いの目が向けられるからでもある。悲しんでいること、少なくとも悲しみを表に出すことは、きわめて危険なのだ。ロシアは不平を口にすべき場所ではない。シベリアに送られたいくなければ。」(237 頁)とも書いています。1945 年 8 月 9 日に「満州国」になだれ込んできたソ連兵は、悲しみを表に見せたりするようなタイプの人間ではなかったのではないのでしょうか。

このジッドが書いた本には、「裏切者」と罵声が浴びせられ、左派メディアからは反共宣伝の書だという批判が殺到しました。けれどもこのジッドの言葉は、日本のテレビ番組『ひるおび』で八代英輝弁護士が、「日本共産党はまだ綱領に暴力革命の綱領をもっている」といったような明確な反共デマとは、はっきりと異なっていました。

1924 年のレーニン死以降、ソ連では、トロツキーは追放され、1920 年代後半からスターリンが権力を掌握していました。ジッドがソ連を旅していたころは、スターリンの神格化と粛清による銃殺が相次いでいた時期でした。ジッドは、自分が構想した「平等」とは程遠いソ連の現実を感じ取っていたのでした。一方、同じフランスの作家だったロマン・ロランは、「スターリンを支持する」と書きジッドを批判していました。

また、日本のプロレタリア作家、宮本百合子もまた同様にジッドを批判していました。

しかし、ソ連崩壊の 30 年後の今から見るとロマン・ロランや宮本百合子は、現実から乖離した無残な文章を書いていたことが、はっきりしているでしょう。ロマン・ロランは 1939 年の独ソ不可侵条約でヒトラーとスターリンが手を結ぶのを見てさすがにソ連とは距離をとるようになります。しかし、日本では、ソ連のユートピア幻想は消えず、1953 年のスターリン死後のフルシチョフのスターリン批判でようやくソ連の現実に気が付くという人が多かったです。「日本からは一人のジッドもでなかった」と渡辺一民氏は『近代日本の知識人』(筑摩書房 1976)のなかで述べています。

世界史的な文脈で見るとソ連のユートピア幻想とは違う現実をいち早く経験したのが、ハルピンの宝

田少年だったということになるでしょう。

人はしばしば、他国を過度に理想化してしまうものです。

たとえば、北朝鮮に招かれ接待漬けにされた日本の知識人が、北朝鮮を楽園だと考えてしまうような例がそれです。しかしジッドは、そのような誤りを最初はしていたのですが、途中で自分の誤りに気が付き、正確にソ連の現実をとらえることができました。

そして日本ではソ連へのユートピア幻想が根強く、ジッドのような人はほとんどいませんでした。それは何故だったのか。それはソ連が崩壊して 30 年後の現在も考えるに値する問題のように思われます。

おわりに

以上、宝田さんの本を読んで感じたことを手紙形式で書いてきました。

次の手紙では、東宝と中国の関係、『ゴジラ』の科学者についてなどもう少し掘り下げたものを書いてみたいと思います。コロナ禍の第六派がやってきていますが、どうか気を付けてお過ごしください。どうぞお元気で。

市民科学研究室の活動は皆様からのご支援で成り立っています。『市民研通信』の記事論文の執筆や発行も同様です。もしこの記事や論文に興味深いと感じていただけるのであれば、ぜひ以下のサイトからワンコイン（100 円）でのカンパをお願いします。小さな力が集まって世の中を変えていく確かな力となる—そんな営みの一歩だと思っていただければありがたいです。

[ワンコインカンパ](#)

←ここをクリック（市民研の支払いサイトに繋がります）